

博麗霊夢物語

はるちい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪達にとってとっても大切な友人の死から1年。

彼らは友人の死から立ち直るためにある行動をとった。

その行動とは…

目次

前書き	1
誕生	4
お留守番	11
入学式	19
決心	28

前書き

今日は朝から、幻想郷の妖怪やら妖精やら神やら幽霊やらが珍しく騒いでいます。なぜなら今日は久しぶりに宴会をするからです。

私も、久しぶりにテンションが上がっています。

会場は博麗神社がある山のもと。

そこには、私たちにとって大切な、大切なある人間が安らかに眠っています。



彼女は歴代の巫女のなかで唯一、私たちを惹き付ける巫女でした。

その理由は、惹き付けられた私たちにもよく分かりません。

でもなぜか、私たちにとって彼女は大事な友人だったので。

彼女がまだ生きていた頃、私たちはことある事に、いえ、何もなくても理由をこじつけてよく宴会をしました。

彼女がまだ生きていた頃、神社の上空はよく、カラフルな弾幕で彩られていました。

彼女がまだ生きていた頃、私たちは用があつてもなくても、神社を訪れていました。

彼女がまだ生きていた頃、私たちは幸せでした。

それが変わったのは1年前。

彼女が、亡くなりました。

人間の一生は、私たちのたった一瞬にすぎない、儂いものです。

人間の体は、私たちにってはすぐ壊れてしまふ、脆いものです。

私たちにとって人間とは、食べたり襲ったりする対象でしかありません。

でも何故か、人間である彼女は、私たちの心に深い深い悲しみを遺していきました。

私たちはこの時初めて、彼女が大切な友人だったのだと気づきました。

彼女の次の次の代の巫女は私たちが拒みました。

私たちは、彼女のいない、そして私たちが拒む神社にはもう行かなくなりました。

大好きだった宴会も、弾幕ごっこも、彼女がいなければ楽しくなくて、自然としなくなりました。

彼女のおかげで行くことのできていた人里にも、うかつには近づけなくなりました。

さすがにストレスを抱えた仲間も出てきて、異変の数は大幅に増えました。

異変を起こしても、私たちの悲しみは決して無くなりはしませんでした。

私たちは、彼女の月命日には必ず、お墓の掃除をしていました。

彼女が亡くなってから今日まで、毎月お墓の掃除を続けてきたというのは、私たちが

どれだけ彼女を大切に思っていたかがわかるでしょう。

私たちは、彼女が生きていたほんの一瞬の日々が懐かしくて恋しくてたまりません。忘れられないからこそ、悲しくて辛くて仕方がありません。

でも、いつかは、私たちのそんな悲しみや寂しさや辛さを、幸せな思い出が消してくれることでしょう。



今日は1年という節目でもあり、そろそろ気持ちに整理もつけない頃なので、私たちは話し合って、ある1冊の本を書くことにしました。

ある種の伝記のようなもので、彼女の一生が物語風にまとめられています。

そして、私たちの幸せな思い出も、この1冊に詰め込んであります。

いつかこれを読んだ時に、幸せな思い出が溢れ出てくるように、願いを込めて。

題は『博麗霊夢物語』。

彼女への愛と心を込めて、執筆いたしました。

どうぞ暖かい目でご覧ください。

射命丸文

誕生

まだ幻想郷にスペルカードルールというものが存在しなかった頃、博麗神社でくつろげる妖怪は八雲家の住人だけでした。

これは、博麗霊奈が巫女だった頃の話。



その日も私八雲紫は、博麗神社でスキマを使って、外の世界を物色していた。「なあ紫、もうそろそろやめたらどうだ？」

「えー、まだやるー。」

「はあ。」

なんだか霊奈に呆れられてる気がするけど、気にしない気にしない。

あつ、この湯のみ可愛い。もらっちゃおうつと。

「あ、またそうやって勝手にものを取ってくる。」

「バレなきや犯罪じゃないんだよってどこかの誰かが言ってたわ。」

「つたく、紫はこれだから……。」

んー、そろそろ霊奈がキレそうねー。

しかたない、やめましょうか。

でも、もうちよつとだけ。

あつちの方へ行きたいわ。

…ん？

「あれ？」

「どうした？」

私は、霊奈の近くにスキマを移動させた。

「ねえ、あなたも感じない？」

「…確かに感じるな。この先って本当に…？」

「ええ。確実に外の世界よ。なのに、おかしいわよね？」

「うん。外の世界にはこれの持ち主はいないはずだ。だとしたらいったい…」

「探してみましようか。」

私たちが感じたもの、それは「霊気」と呼ばれるエネルギーだった。

少なくとも私は外の世界に霊気を持っている生き物はいないと聞いている。

だから、外の世界で霊気を感じるといふのはありえない話だ。

ということは、結界のどこかが緩んで妖怪とかが外に出てしまったってことかしら。

私は、スキマを操って霊気の持ち主を探した。

妖怪だとしたら、意外と簡単に近づけたわ。

なぜ逃げないのかしら。

私も少し妖気を出してみてるのに、なぜ気づかないんだろう。

まあでも、今はそいつを捕まえる方が先。

「靈奈、この先にいるはずよ！一緒に行きましょう。」

「ほんとに？」

「2人で確認しましょう。」

私たちはスキマに入り、外の世界へ足を踏み入れた。

スキマから出て少し歩く。

靈気はどんどん強くなっている。

「このエネルギーの強さ、あなたが巫女の修行を始めた頃にそっくりね。」

「もう忘れたさ。」

靈奈が巫女の修行を始めたのは寺子屋に入学してすぐの6歳。

靈奈も最初は意味もなく靈気を放出してたわ。ああ、懐かしい。

彼女はもう、靈気の放出をセーブすることが出来るようになってる。

あの頃は靈奈もかわいかったわ。

神社で修行をしに人里の家から来る姿が愛らしくてね。

… ちょっと逸れたわね。

さあ、この靈気はどこ妖怪のものかなーつと。

…!?

見つけた!?

うそでしょ!?

えー！！！！！！！！！！
!?!?

ほんとにびっくり。

だって、私たちの前に現れた靈気の持ち主は、妖怪なんかではなく、ダンボールの中で眠っている赤ちゃんだったんですもの。

私は靈奈の方を見た。

普段感情を出さない靈奈からもびっくりしている様子が伝わってきた。

私は妖気を出すのをやめて、赤ちゃんを抱き上げた。

このからだのかたちや顔は、紛れもなく人間の子だ。

なのに小さな体からは、靈気が溢れるように出てきている。

「あなたも、ほら。首だけ気をつけてね。」

私は靈奈に赤ちゃんを渡した。

靈奈は恐る恐る、赤ちゃんを抱いた。

「うん、確かに人間の子だな…。」

霊奈のが良いせいとか、この絵面は赤ちゃんを襲ってるようにしか見えないわ。それにしてもこの赤ちゃん、こんなダンボールに入れられてたのね。

ん？紙が入ってるわ。何か書いてある。

「霊奈、紙が入ってたから読みあげるわ。」

『この子を拾ってくれた方へ』

私は訳あつてこの子を育てられなくなりました。

誕生日は○月×日です。

名前はつけていません。

どうかこの子をかわいがってあげてください。』

え、この子まだ生まれて2週間しかたつてないの？

それより、いつから捨てられてたの？

もしかしてさつきから泣かないで眠ってるのは単に弱ってるだけ？

この子をどうしましょうか。

私があればこれ考えているとき、さつきから黙っていた霊奈が口を開いた。

「紫、私この子を育てようと思う。私はこの子の親になろうと思う。この子がこれほどの霊気を持っているから博麗の巫女にびったりだって言うのもある。でも、それ以上に

思うのは、家族がないなんて、そんなバカな話ないじゃないか。」

「ええ、私もその通りだと思う。でも、親になるには相当の覚悟が必要だと思うわ。」

「そんなのわかってる。でも、親は私だったとしても、この子の育児を一緒にしてくれる家族のような存在はたくさんいるんじゃないかな。」

「確かにそうね。私だってあなたをサポートするつもりだし。いいわ、この子を育てましょう。」

「それでこそ紫だ。ありがとう！」

「いいえ。」

霊奈は嬉しそうに笑ったあと、赤ちゃんを見つめた。

そしてポソツと「幸せにしてやるからな」と呟いた。

「名前どうするの？この子まだ名前ないみたいじゃない。」

「え、ああ。そうだな。」

私たちはスキマに入った。

神社に無事ついた時、霊奈が言った。

「そうだ、”霊夢”にしよう。私の”霊”の字と、”夢”だと疑いたくなる出会いだっただってことで。」

「あら、あなたにしてはいい名前ね。霊夢、いいじゃない。」

「紫、ひと言余計だとは思わないか？」

「さあねえ。」

「は？」



このようにして博麗霊夢は誕生しました。

このあとの育児が本当に大変だったのは、また別のお話。

八雲紫

お留守番

霊夢が3歳になった頃のお話。



ある日、博麗親子がいつものように庭で遊んでいた。

そこに、こちらもいつものように突然現れたスキマ。

いつもは「わっ！」とか言つて霊夢を驚かせる紫だが、今日は違った。

普段は隠している妖気が、今日は大量にでていた。

「紫、どうした、なんかあった?」

「人里の近くで妖怪が暴れ始めたらしいわ。しかも相手はそこら辺の低級妖怪なんかじゃない。このままじゃ人里だけでなく幻想郷自体が危ないの!」

「本当か!? 急いで準備してくる!」

霊夢はとても驚き、そして深刻そうな顔をしていた。

何が起きたのかはよく分からないけど、なにか大変なことが起きているということだけは幼い霊夢にも分かったらしい。

霊夢は母が準備をする様子を不安そうな顔で見つめていた。

そして自分の横に立っている、いつもと違う紫のことも。

「ねえゆかり?」

「…」

霊夢は紫のスカートの裾を思いつきり引つ張った。

「ねえねえゆかり!」

「あつ、ん?」

「どうしたの?おでかけするの?れいむは?」

「霊夢は来ちゃダメよ。お留守番してなさい。」

「なんで?」

「今ね、人里の近くで妖怪が悪いことしてるの。でね、その妖怪を放っておくと、幻想郷が壊されちゃうかもしれないの。」

「こわれちゃうの?」

「そうならないように私とお母さんが妖怪を止めてくるから。だから、寂しいかもしれないけど、いい子にお留守番してなさい。」

「…うん、分かった。」

まだ幼い霊夢には、止めるということがどれだけ危険なことか分かっていなかっただろう。

「紫、行こう。」

その霊奈の一言で、2人は行ってしまった。

霊夢は1人残された。

これまでも何度か留守番をしたことがある。

今回も霊夢はいつも通り遊んで待つことにした。

しかし、2人は全然帰ってこなかった。

いつも日が暮れる前には帰ってくるのに、今日は2人が帰ってこないまま夜になってしまった。

——おなかすいたな。ごはんどうしよう。お風呂どうやってわかすんだろう。

まだ3歳の霊夢には何も出来ないのが当たり前。

シーンとした神社と空腹と不安で、霊夢は泣き始めてしまった。

霊夢は、泣き声を聞いた誰かが来てくれるかもしれないと思った。

でも、誰も来なかった。

そして、泣き疲れてそのまま寝てしまった。

◇◇◇

藍は式の橙を連れて博麗神社に向かっていた。

——すっかり遅くなってしまったな。

今ごろ霊夢がお腹をすかせていることだろう。

「橙、ご飯は作れるようになった？」

「はい！」

「お風呂は沸かせるようになった？」

「はい！」

「お台所やお部屋の掃除はできるようになった？」

「はい！」

「いま紫様と霊奈が必死に妖怪退治をしている。私もその応援に行く。数日間家を空けることになるだろう。」

「はい。」

「橙は、ここじゃなくて、神社で霊夢と一緒に待つてなさい。」

「分かりました！」

家を出る前にした会話が思い出された。

橙は、私の誇れる式だ。

大丈夫だろう。

問題は、紫様と霊奈の方だ。

霊夢の世話を誰にも頼んでないのに夜になっても帰ってこないのは、やはり今回の異

変は普通じゃないっていうことなのだろう。

一体どんな相手なんだ……。

「藍様？」

「ん？どうした？」

「着きますよ？降りないんですか？」

「…… あ、降りよう。」

いけない、ずっと考え事してた。

とりあえず、まずは霊夢のところに。

——あれ、寝てる。こんなところで寝てたら風邪引くぞ。

お？

よく見ると、畳が少し濡れていた。

霊夢の閉じているまぶたには涙がにじんんでいる。

「…… 霊夢、遅くなつてごめんな。」

橙と布団を敷いて、霊夢を寝かせた。

——早くお母さんを帰らせるからね、霊夢。

「それでは、行つてくる。霊夢をよろしくな。一緒にいてやるんだぞ。」

「はい！気をつけてください！」

霊夢のためにも、戦っている2人のためにも、藍は急いだ。

◇◇◇

それから3日後、霊夢と橙は一緒に遊びながら、3人の帰りを待っていた。

「まだかえってこないね。」

「うん。」

そんな会話が何度繰り返されたことか。

その度に橙は霊夢に言っていた。

「霊夢のお母さんも、紫様も、藍様も、幻想郷を悪い妖怪から守るために頑張ってるの。だから霊夢も、ちよつと寂しいけど、橙と一緒に留守番頑張ろう！」

この橙の言葉で、霊夢は寂しいのをぐつと我慢して、泣かずに留守番できていた。

この日も3人は帰ってこないまま夜になってしまった。

霊夢と橙は、すでに布団で寝っ転がっていた。

この日は何故か眠くなくて、2人でおしゃべりをしていた。

「明日は帰ってくるといいね。」

「うん。」

毎晩していたこの会話をして、さあ寝るかという時、見たことのあるリボンが出現した。

「あっ!!」

そのリボンは空間に裂け目を作り、それを強引に広げた。

そして中からは、霊夢と橙がずっと待っていた3人が出てきた。

「おがあげーん!!」

霊夢はずっと我慢していた涙を流して叫んだ。

「ゆかりさまー!らんさまー!」

霊夢より年上だからってお姉さんっぽく振る舞っていたけど、橙もやはり我慢出来なかった。

2人は裸足で庭に出て、それぞれに抱きついた。

霊奈や紫や藍は、妖怪退治で服が汚れて、怪我もしていて、体も服もボロボロになっていた。

3人はひどく疲れている様子だった。

でも、ずっと頑張っていたのはこの子達も同じ。

抱きついたせいで汚れてしまった霊夢と橙を見て、霊奈は決めた。

「仕方ないな。みんなでお風呂に入って寝よう。今日は神社に泊まっていつて。」

「ええ。そうさせて。ありがとう霊奈。」

その後はみんなでキャーキャー言いながらお風呂に入り、ぎゅうぎゅうの布団に川の

字になって寝た。

こうして、霊夢の長い長いお留守番は、幕を閉じた。

このあとしばらくは、霊夢も橙もかなりの甘えん坊になってしまったそうさ。

入学式

霊夢はやつと6歳になりました。今日は寺子屋の入学式です。

ここでこの世界の寺子屋の設定を。

寺子屋には全部で3学年ありますが通うのは6年間なので、入学式は2年に1回。

対象は、入学時に6歳以上の子ども（同程度の妖怪でもOK）。

授業は月々金。金曜日の最後の授業はどの学年も共通で体育です。

教師は慧音だけなので、学年ごとに授業時間が違います。

1年生：8：30～10：10 《 授業時間30分×3、休み時間5分×2 》

2年生：10：20～12：30 《 40分×3、5分×2 》

3年生：13：00～15：50 《 50分×3、10分×2 》

こんな感じですよ。



「おかあさん、はやくはやく!!」

「ちよつと待ってて霊夢!... あーもう、普段巫女服しか着ないから、着物を着るのに時

間がかかるな。」

今日は寺子屋の入学式。主役の霊夢はもう既に四つ身という子供の庶民服を着ている。

ようやく着替えが終わった。

「さあ霊夢、行くかうか。」

「うん!!」

博麗神社から人里まではかなりの距離がある。

それに、通学路の途中には妖怪達がうじゃうじゃいて危険だ。

だから、霊夢は寺子屋へ、空を飛んで通うことになった。

2人は、期待と不安を胸に飛び立った。

霊夢には、3歳くらいから霊力を使う練習をさせてきた。

もちろん修行などというものではなく、遊びの一環でだが。

なぜかと言うと、霊夢はただ育ってきた場所が博麗神社で、かなりの霊力を内に秘めているというだけの、他はごく普通の子供だからだ。

博麗の巫女は代々、寺子屋に入学して少したったくらいこの時期の子供から候補が挙げられ、その中で修行をしたいと言った子供だけを選ぶ、という方法で決めてきた。

だから私は、霊夢にも、彼女本人が修行をしたいと言うまで修行をさせるつもりはない。

でもそれでも、霊夢はかなりの霊力を持っているから、それはちゃんと使えるようにいままで遊びと称して練習させてきたのだ。

：：練習させてきて思ったが、やはり霊夢はただ者ではない。

私は霊夢と、霊力で弾をつくつて的に投げるゲームをしてきた。

彼女の命中率は半端なく、いつもの真ん中を綺麗にくり抜いてくれる。

あとは、お互いに霊力の弾を投げあつて当たつた方が負けというゲームも、最近は決着がつくのにかかなりの時間がかかるようになった。

そして、空を飛ぶということも、すぐに覚えた。

今では、私と並んで飛べるほどスピードも出せるようになっていた。

一応言っておくが、霊夢はまだ6歳になったばかりである。

しばらく経つて、人里が見えてきた。

「おかあさん、どこが寺子屋？」

「寺子屋はあそこだけど、霊夢、寺子屋に行く前にまず人里の入口へ行こうか。」

「なんで？」

「霊夢、あのね、私たちは空を飛べるけど、人里の人たちは飛べないの。私たちが空から降りてきたら、人里の人たちはびっくりしちゃうでしょ。」

「なるほど。」

「だから、私たちは普通に歩いて人里に入った方がいいの。霊夢は明日から1人で学校に行くことになるけど、1人でもちゃんと入口から歩いて入るんだよ。分かった？」

「はい!!」

霊夢は、今日が初めての人里。

博麗の巫女には拾ってきた子供がいる、ということとは人里にはもう知れ渡っているから大丈夫だとは思いますが、それでもどんな目で見られてしまうかが不安だ。

それに、寺子屋でいじめられないかどうかも不安だ。

ギィと人里の扉を開け、手続きをし、霊夢の紹介をして人里に入った。門番はただ、「かわいいお子さんですね。」と言っただけだった。

周りに建ち並ぶ民家や店に目を向けて、楽しそうにしているわが子。初めて人里に来て、はしゃいでいるわが子。

人里の子にしたら、すごく変な子なんだろうな。

上手くやっていけるといいけど。

「霊夢、ここが寺子屋だよ。中に入ろうか。」

「うん!!」

教室に入ると、そこには5人ほどの生徒がもう座っていた。机の数からすると、このクラスは14人だろう。

入学式が始まる前、私は先生に挨拶をした。

「お久しぶりです先生。この度は、娘がお世話になります。」

「やあ、久しぶりだな靈奈。学校1喧嘩好きな問題児が博麗の巫女だなんてなあ。」

「あははっ、先生それは靈夢に言わないでくださいよ。」

「ああ、分かっているよ。そうそう、3年くらい前の大異変の時は本当に助かったよ。ありがとうね。」

「いえ、時間がかかってしまい申し訳ないです。」

「早期解決だったよ。さすがは我が生徒だな。」

そう、私にも寺子屋へ通っていた時期があったのだ。

別に何でもない感じにしているが、本当は先生や教室やその匂いがすごく懐かしくてたまらない。

全員が揃ったところで入学式が始まった。

ひとりひとり名前が呼ばれて、返事をしていく。

ひとときわ目立ったのが、金髪ロングのちいさな女の子だ。

「霧雨魔理沙」「はい!!」

元気な返事だなあ。ちよつとハスキーな声がこれまた可愛い。

他の子は特にこれといった特徴がなかったので、申し訳ないけど覚えていない。

あ、次だ。

「博麗霊夢」「はい。」

さつきまでもものすぐくはしやいでいたのに、流石に緊張したのか少し小さめの声だ。

霊夢はこんなに人に囲まれたことがなかったからなあ。

多くて私、紫、藍、橙だけか。

橙以外に、同年代の子と遊んだこともない。

そんな霊夢にとつては、声を出せたことがそれだけですすごいことだろう。

私がひとりで感心していると、さつきからチラチラ感じてはいたが、さつと隣に来て、耳元にスキマを開けたやつがいた。

「霊夢、かなり緊張してるわね。」

紫が呟いた。

「でも返事ができてよかった。」

「ええ。そうね。」

私は、じつと座っている霊夢を見つめた。

私の心も霊夢の心も、不安でいっぱいだった。

入学式が終わり、10分ほど、子どもは子ども、親は親で話す機会があった。

やはり「巫女さんですか？」と聞かれた。

「いつもありがとうございます。」「お子さんの霊夢ちゃん、あなたが拾ったんでしょ？」
「そんな庶民服、巫女さんでも持っているんですね。」

とか、それぞれが思い思いの事を言ってきた。

「巫女なんて妖怪殺しか人殺しのどっちかよ。」なんて声も聞こえてきた。

一応笑顔でいたが、やはり何か特別な好奇心を持つ目で見られるのはつらいな。

やっと私から話題が逸れた時に、子どもたちの方を見た。

喋っている子はあまりいなかった。

霊夢も一人で荷物の整理をしていた。

まあまだ友達なんてな、なんて思っていた。

でもその時、あの金髪ロングの魔理沙ちゃんが、霊夢に近づいていった。

「なあ、おまえ博麗のみこの子どもだろ？」

「……うん。」

おまえ、私の子に何を言おうとしてるんだよ……！

思わず、つかかりそうになった。

「私は……魔理沙っていうんだ。よろしくな！」

魔理沙は、にかつと笑った。

「……！私は霊夢。よろしくね、魔理沙！」

霊夢もびっくりはしていたが、満面の笑みで答えた。

ああ、霊夢と友達になってくれるのか。

本当に良かったと心から思った。

心配性だな、私って。

魔理沙ちゃん、本当にありがとう。

その帰り道。

飛んでる途中、いつのまにか紫と藍と橙が横にいた。

「霊夢、入学式バッチリ見てたよ！」

「ちゃんと返事が出来てすごいな。」

橙と藍が霊夢のことをいろいろ褒めてくれた。

「人が沢山いてびっくりした〜。」

と、霊夢。

「そういえば、魔理沙、だったかしら。あの子が友達になってくれてよかったわね。」

「うん！」

紫も藍も橙も、ずっと霊夢のことを心配して、入学式を見守ってくれてたらしい。

紫は、表には出さないが、霊夢に友達ができたことをすごく喜んでる。

「みんなと仲良くするんだよ。」

と、私が言うと

「うん!!」

霊夢は大きな声で返事をした。

この日は神社で5人で夕ご飯を食べた。

とても賑やかな食卓で、霊夢も楽しそうだった。

3人が帰ったあと、霊夢はお絵かきをしていた。

夜、霊夢が寝た後に、私はこっそりその絵を見た。

そこには、私たち5人の絵が。

そして、まだ習っていない不完全な平仮名で、『かぞく』と書いてあった。

私だけでなく、紫たち3人も霊夢にとっての家族なのだろう。

そうだね。私たちは家族だね。

私たちなら、きつとこれから何があっても乗り越えられるね。

私は、とても幸せな気持ちで眠りについた。

決心

これは、靈夢が寺子屋に通い始めて少したった時のお話。



「紫・紫・幻想郷は、紫がつくったの!？」

靈夢は寺子屋から急いで帰ってきたらしく、息を切らしていた。

「今日の歴史の授業の時に習ったの!紫が世界を2つに分けたんでしょ?すごいね!!!」

上ずった声で言った。

靈奈と紫は顔を見合わせた。

——ついに、この日が来たか。



一週間ほど前。

時は靈夢がいない午前中、博麗神社にて。

紫は、次の博麗の巫女の選定に入る時期だと、そう靈奈に言った。

「いちばん能力的に適しているのは靈夢だわ。逆に、この年頃の子達の中には、他に適す

る子がないの。」

「ああ、それはよく分かっているし、私も霊夢を次の巫女にしたい。ただな…。」

「妖怪退治の様子を見せなきゃいけないんだっけ。」

「ああ、そこなんだよ。」

「霊奈の時はどうだったかしら？私もう忘れちゃった。」

「私の時はな、候補が私を含めて3人いたんだ。あるとき紫がその3人に「付いてきなさい。」ってだけ言つて、博麗の巫女の妖怪退治の様子を見せたんだ。その後紫が「あなただ、博麗の巫女になって人里の人間を守る気は無い？」って。他の2人は妖怪退治を見て怯んだから、私になるしかないって強く思った。博麗の巫女は大切だつていうのを寺子屋で学んでいたしね。だから、人里の家から神社まで通つて修行して、12になつたときには家を出て修行して、やっと巫女になった。」

「そっか、そうだったわ…。霊夢は妖怪退治の様子を見てどんな反応をするかしらね。」

「そこなんだよ。それに妖怪退治をしているのが自分の母親つていうものな…。」

「まあ、霊夢が自分から聞いてきた時が話すチャンスね。」

「ああ、そうだな。」

紫はおじやましました〜と言って、スキマの中に入っていった。



——今だ、今が話すチャンスだ。

まずは紫から、話し始めた。

「霊夢、そうよ。幻想郷は私がつくったの。幻想郷は、もう一つの「外の世界」と呼んでいるところで、人間に忘れられたものがくる所なのよ。」

「忘れられたもの?」

「そう。幻想郷には人間より妖怪の方が多いでしょう? 外の世界はこことは逆に、人間が多くて妖怪はほとんどいないの。」

「妖怪いないの?」

「昔はいたんだけど人間に忘れられちゃったの。だから、忘れられた妖怪は幻想郷に来たのよ。外の世界の人間に忘れられたものが、ね。」

「あー、うーん、まあ、なんとなくわかったかもしれない。」

「霊夢にもいずれ分かるわ。今はなんとなくでいいわよ。」

「うん!」

ここからはあなたが話す番と、紫が目で霊奈を促した。

「でな、霊夢。紫は幻想郷を作る時、人間と妖怪が同じ幻想郷で暮らせるように、ある役割を作ったんだよ。それが、博麗の巫女だ。博麗の巫女は、簡単に言うところ幻想郷の人間の代表みたいなものだね。」

「おかーさんも?」

「ああ、そうだ。」

「悪い妖怪をこらしめるっていうやつは?」

「ああ、それはね、妖怪退治と言って、人里の人を襲ったり襲おうとしたりしている妖怪を退治するんだ。」

「じゃあ、おかーさんは、幻想郷の人を守ってるの?」

「ああ、そうだ。」

「へえ、かっこいいね!!ねえねえおかーさん、霊夢も博麗の巫女になれる?」

霊夢と紫はハツとした。

「:・ 修行をすればなれるよ。でも、まずはお母さんが妖怪退治をしてるところを見てね。それからほんとに修行をするかどうかを決めてもらうから。分かった?」

「うん!」

それから数日後、神社に妖怪退治の依頼が来た。

寺子屋はもうすぐ終わる。

霊夢を連れていくにはちょうどよかった。

青い空が広がり、太陽が眩しく光っている。

ただ、靈奈の表情だけが重かった。

「靈奈。そんなに緊張してどうしたのよ。」

「ああ、うん。まあな……。」

スキマから身を乗り出した紫は、靈奈が妖怪退治の準備する様子をじつと見ていた。

靈奈の目には不安が宿っていた。

「……靈奈、靈夢はそんな子じゃないわ。きつと大丈夫。あなたのことを怖がったり、博麗の巫女になるのをやめたりなんかしない。きつと、何か感じ取ってくれるはずよ。」

「ああ、そうだといいいんだがな。」

「とりあえず、あなたはなんにも考えずに、いつも通りやってきなさい。ありのままを見せるのが、今日のあなたの役割よ。」

「……分かった。ありがとう、紫。頑張ってくる。」

紫は、やっといつもの顔に戻った靈奈を見て、少し笑った。

「じゃあ、靈夢を迎えに行っていくから、あなたは直接向かいなさい。」

紫はひらひらと手を振ってスキマに入った。

人里には異様な空気が張り詰めていた。

妖怪が、人里の門を開けようとしていたのだ。

それを人里の男達が必死になって食い止めていた。

それはもちろん、門から遠い寺子屋にまで伝わっていた。

慧音は、子供たちにつつと教室にいるように言うと、どこかへ行ってしまった。

こわいよ

死んじゃうのかな

どうなっちゃうの

おとうさん!!おかあさん!!

教室からいろんな声が聞こえてくる。

霊夢は、この前霊奈と紫に言われたことを思い出し、教室を飛び出した!

——おかーさんは、いま、妖怪退治をしに来るはず。

ぜったい見なきゃ!

霊夢は自分の感覚を頼りに、妖怪がいそうな方へ走っていった。

途中の大人達の制止の声も聞かず、無我夢中で走った。

そして、スキマに落ちた。

「いったあ!つて、紫?ハハハハハ!」

「ハハハはスキマの中よ。」

「出して！おカーさんの妖怪退治を見に行くの！」

「分かつてるわ。でも、ここから見た方が安全なのよ。」

霊夢はきよんとんとしていたが、スキマの一部が開かれるとすぐ理解した。

そこからは、霊力と殺気を帯びた母親がものすごいスピードで飛んでいるのが見えた。

霊奈はまず、人里の中から門の所に行った。

そこには門を必死に止めている男達がいた。

「遅くなって申し訳ありません。ただ今妖怪を門から離しますので、まだ門は押さえておくようお願いが致します。」

と言い捨てて、霊奈は飛んで門の外へ行った。

そして空から妖怪をひきつけ、人里から離れた。

——妖力の量からしてこいつは低級妖怪だろう。

でも、こいつはガタイがいい。

吹っ飛ばされたら危ないな。

睨み合う中、先に動いたのは妖怪の方だった。

靈奈に向かってまっすぐ突進してくる。

それを靈奈はターンで交わすと同時に蹴りをいれた。

妖怪は土煙をあげながら吹っ飛んだ。

ただ、これで終わらないのが妖怪退治。

土煙の中から、明らかに殺傷能力のある妖力の弾がいくつも飛んできた。

——甘いな、妖怪よ。

靈奈は、その決して少なくない弾の間をすすると抜け、靈力の弾を妖怪めがけて打ち込んだ。

靈奈の高密度で殺意を持った靈力の弾をよけられる妖怪はそこら辺にはいない。

妖怪は、逃げることも出来ず、まともに靈奈の弾をくらった。

辺りには2度目の土煙があがった。

「……おかーさん、かつこいいい……」

靈夢はふと、呟いた。

いつもの遊びとは違い、真剣なおかーさんから放たれる靈力の弾は、強くて美しかった。

土煙の中、堂々とたっているおかしさん、かつこよかった。

でも、やがて土煙が晴れたとき、霊夢は見てしまった。

堂々と立つおかしさんの向こうで、血を流して倒れている妖怪を。

霊奈は、妖怪が確実に死んだことを確認すると、静かに手を合わせた。

「霊奈、お疲れ様。よく頑張ったわ。ありがとう。」

紫が霊夢を連れて霊奈のところに来た。

霊奈と紫は、深くえぐれたところに妖怪を埋め、何事も無かったかのように周りを元の状態に戻した。

その帰り道。

「霊夢、あなたには自分の母親が妖怪を殺したようにみえたかもしれない。確かに結果的には殺してしまった。でもね、一方で、多くの人間を救っているのよ。あなたも今日、人里に妖怪が攻めてくる恐怖を体感したはず。霊奈は人里を守ったのよ。」

「それにな、霊夢。人間を傷つけたり殺したりしない妖怪となら、仲良くしてもいいんだ。紫だって、藍だって、橙だって、今日のやつと同じ妖怪。でも、私達を襲わないだろ。そういう妖怪となら仲良くしてもいいし、人間と同じように守ってあげてもいいん

だ。」

「まあ、一週間後に決めなさい。よく考えるのよ。巫女になるかならないか。」

「うん。分かった。」

霊夢はただ呆然と飛んでいた。

1週間後。

結局、けーね先生に聞けなかったな。

忙しそうだったもん。

……「巫女になるかならないか。」か。

おかしさんの戦つてるところは、初めて見たけどかつこよかつた。

でも……

寺子屋にいた時の恐怖や、人里の男達が必死で門を押さえている姿や、血を流して倒れてる妖怪の姿が目の前を通り過ぎていく。

確かに、博麗の巫女は人を守ったんだ。

人を守るのとはすぐくかつこいと思う。

でもさ、だからって妖怪を傷つけてもいいのかなあ。

やっぱり、聞いてみよう！

霊夢は寺子屋へ急いで戻った。

ちょうど休み時間になったとき、霊夢は思い切つて先生のところに行つた。

「せ……先生！あの！ええと、その、聞きたいことが、あるんです、けど……」

「ん？どうした？なんでもいいよ、話してごらん。」

先生の声はいつもよりも優しいよ。話してごらん。安心した。

忙しいからつて突き放されるかと思つた。

「えつと……博麗の巫女は……本当に良いんですか？」

「え？」

あーだめだ。うまく言えない。

「えつと、人を守るためなら、妖怪を殺してもいいのは、良いんですか？悪く、ないんですか？」

「……」

先生は私の目をじつと見ている。

そして、全てを察してくれた。

「霊夢、幻想郷の妖怪には2つの決まりがある。1つは、幻想郷中に悪い影響を及ぼすことをしないこと。もう1つは、人里の中の人間を襲わないこと。そして、この決まりを守れなかつたものは、博麗の巫女に退治される。」

「……」

「つまりだな、妖怪は決まりを守らないと、博麗の巫女に傷つけられるか殺されるんだ。博麗の巫女は、なんにも悪くない。悪いのは、決まりを守らなかつた妖怪なんだ。この前のだって、殺された妖怪は人里に入ろうとしたから、博麗の巫女に退治されちゃったんだよ。」

「あー、あー！なるほどー！」

そうか、そうだったのか。

妖怪には決まりがあつたのか。

なんにも悪いことしてないのに、ただ本能で動いただけなのに、なんで博麗の巫女に殺されなきゃいけないんだろう。

1週間ずっとそう考えてた。

でも、なあんだ、簡単なことだった。

決まりがあつたのか。

だつたらもう、

…1週間、私はなんでこんなことで悩んでいたんだろ。

霊夢は、ふつと心が軽くなつた。

「先生、ありがとうございます！」

霊夢はいそいで家に帰った。

「おかしさんただいまー！」

「あ、霊夢、おかえり。」

「あ、紫もただいまー！」

「おかえりなさい。」

「霊夢、座って。」

博麗神社の居間には、大人と妖怪と小さな少女。

「霊夢、考えてきた？」

「うん。あのね、霊夢ね、色々考えたんだけどね、」

「…」

緊張した空気。

「博麗の巫女、なろうと思うー！人を、守りたい！良い妖怪とは仲良くするけど、ダメなことはダメって言わなきゃ！」

「それが霊夢の答えなんだね。分かった。じゃあ、明日から紫と一緒に頑張ろうか。」

「うん！」

「霊夢、今の言葉、忘れちゃダメよ。」
「うん！」

次の日から、霊夢の巫女修行が始まりました。

霊夢はひたむきに努力して、どんどん成長していきましたとさ。